

# 農場回顧 —33年の歩み—

仙頭 照 康

## まえがき

私は昭和62年3月末日で、愛媛大学農学部を定年退官することになったが、後に続く人たちに何か書くようにとのことであるので、これまで農場に勤務し、実習、研究および運営にかかわってきた専任教官として、過ぎし33年を回顧しながら、農場の歩み、思い出、雑感などを織り交ぜて綴ることにする。なお、そのほとんどを、農場主事あるいは農場次長として勤めてきたため、その立場での話になると思う。

### 1. 新居浜農場

私は昭和29年1月、松山農科大学に奉職したが、勤務先は松山市から約60kmの新居浜市大生院（旧新居郡大生院村）の経済農場であった。この農場は昭和23年3月、愛媛県立農林専門学校が約15haを入手し、自作農創設指導農場の名称で開設したもので、畜産と、果樹とを有機的に結合させた山地傾斜地農業の合理的経営に関する教育と、研究とをおこない、合わせて地域の要望に<sup>こた</sup>えることを目的としていた。ここは四国山脈が海岸に接近して走る傾斜地で、用地の大部分は、標高約200mの結晶片岩に由来する洪積台地の未開拓地であったため、とりわけ耕地の造成が急務となり、岡山農地事務局よりブルドーザー1台を借り受け、同年6月より農場挙げて開墾に取り組み、時には学生も参加したと言う。何分にも多くの困難と、障害とを打開しながらの作業であったらしく、当時の職員や、卒業生から、その時の苦労話を聞いたことがある。

この農場は昭和24年6月、愛媛農専の昇格に伴い、松山農科大学附属経済農場と改称された。同時に研修生も10名入学したが、この制度は昭和29年度の2名を最後に廃止された。

赴任当時の農場は、土地造成が終わって数年経過したばかりの、いまだ建設途上の段階で、耕地は有機物乏しく、土地生産力はきわめて低い状態であった。

この農場は前述のように、もともと中山間地帯の農業改善の方途を探ることを目標としていたため、その



写真—1 昭和29年当時の新居浜農場  
台地は飼料畑

モデルケース的な色彩が強く打ち出され、ために10数頭の乳牛と、落葉果樹（モモ、ブドウ、カキ、クリ）とが導入されていた。

ところで、この時期何はさておき、耕地の肥沃化を急がねばならなかったため、畜舎より搬出される厩肥はもちろん、周辺の野草までことごとく、台地の飼料畑および斜面の果樹園に投入していた。厩肥や、台地で生産される青刈り飼料などの運搬には、畜舎横から台地に架設されていたケーブルが果たした役割は大きかった。このころの作業量はかなり多かったため、勤務条件はきびしく、日常の業務もさることながら、早朝と、夜間との乳牛飼育管理があり、さらに建物周辺整地のため、昼休み時間も短縮するほどであった。

経済農場は昭和29年4月、国立移管に伴い、愛媛大学農学部附属総合農場と改称され、新しいスタートを切り、翌昭和30年より農学部2回生全員に対し、1週間の宿泊実習を開始した。であるが宿泊施設などの事情もあって、1班15名ずつの班に分け、春季2回、夏季6回、いずれも休暇中の実施となった。この実習はおもに畜産と、果樹とに関する実技の習得および団体生活の体験を内容としたもので、農林実習2単位のうちの前学期分1単位であった。また、これとは別に、総合農学科3、4回生に対し、4日間の酪農実習を課していた。

学生の宿泊に際し、当初栄養士の協力もあって、大いに張り切ったが、実習期間中、連日の実習指導のほか、事故防止、食事問題、保健面などの気配りも加わり、気の休まることが無かった。しかしながら、参加した卒業生は、実習は苦しかったが、寝食を共にしたことで、連帯感が生まれ、親友も出来て、よい思い出になったと語ってくれた。

一方運営面では、当時収入額が予算配分上、かなりのウェートを占めていたこともあって、生産に重点が置かれたため、実験も心に任せぬ状態で、まさに今昔の感に堪えない。かといって研究活動を等閑にしたわけで無く、時には農場内で研究発表会を開くなど、互いに向上をはかった。また、そのころ地区の農家や、農業団体などの農場に対する関心も高く、見学者の来場、技術指導の依頼も少なくなかった。

やがて昭和33年ごろから新しくみかん栽培が取り入れられるようになり、昭和39年4月には、柑橘特化農場の指定を受けるに至った。このため、これまでの乳牛部門は廃止され、柑橘主体の農場となった。これに伴って、台地の飼料畑は数年で柑橘園に一変し、引き続き実習園が整備されると共に、貯水池、畑地灌漑設備、耕作道が設けられ、集荷場、加工室、低温貯蔵庫などが相次いで竣工した。

従って実習内容も柑橘主体に変更され、農学科2回生30名および経営農学科2回生20名に対し、年4回の季節実習、すなわち、3月中旬剪定（1日）、7月中旬摘果（1日）、11月下旬採取（1泊2日）、1月下旬加工（1泊2日）を実施した。

総合農場は、昭和42年3月、経営農場に、さらに昭和51年1月、新居浜農場と、次々に改称されてきたが、農場統合のため、昭和55年4月より順次移転を開始し、昭和57年12月、発展的に、ついにその幕を閉じることになった。

なかでも着任当時のことは、今も強い印象として残っているが、ここ大生院の山すその荒地に鎌を入れてより30数年、日照不足、低温、強風など満足すべき立地とは言えない場所で、悪条件と闘いな

がら、それなりの役割を果たし、多くの人たちの夢の跡となったこの農場に、愛惜の情を禁じ得ない。

## 2. 松山農場

松山市の農学部隣接農場は、昭和20年4月、愛媛県立農林専門学校附属研究農場として設置され、松山農科大学を経て、愛媛大学農学部に引き継いだものであるが、もともと愛媛県立松山農業学校が昭和4年5月、現在地の松山市樽味（旧温泉郡桑原村）に、実習地として開設したもので、その後増加した農学部学生や、附属農高生徒の共用実習地並びに実験圃場としては、十分な面積と言えなかった。こうした状況下、実習や、研究上多くの問題をかかえながらも、関係者一同協調し、綿密な打ち合わせによる実習計画に基づいて、圃場を活用し、密度の高い実習をおこなった。何分にも学部と隣接していたため、研究や、運営上の関連も多く、かなり多忙な日々であった。この時期、農場内には約500種のバラが咲き、駐日英国大使ご夫妻の来場があるなど見学者も多かった。また、農場で生産される新鮮な牛乳、野菜、果物、花など多くの生産物が学内販売され人気があった。ために教職員や、その家族の方々も多数出入りし、農場は常に活気に満ちていた。

研究農場は51年1月、松山農場と改称されたが、既に農学部の新たな拡充整備計画に基づく実験設備や、建物なども年々増加を続け、その用地として実習地も充当されてきたため、農場はますます狭隘となり、実習や、研究に支障が生じるようになった。加えて、周辺の宅地化が進み、日照、通風が不良となり、用水も汚染されるなど、環境が日増しに悪化すると共に、家畜の飼育、農薬散布、厩肥の処理などにも掣肘を受けるに至った。そのうえ、当初よりの果樹園と、飼料畑との分散は、機械類の運用や、労力面などで、管理運営上の問題を温存していた。

## 3. 附属農場（北条）

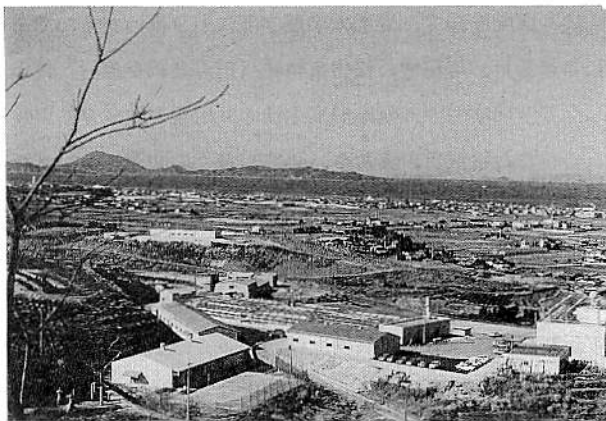
前述のように松山農場は狭隘で、新居浜農場はあまりにも遠隔地に過ぎるなどの事情から、昭和47年ごろより農場問題が検討されるようになり、昭和48年農場移転統合計画が具体化した。このころ既に農場では、業務のかたわら、新農場設置の候補地探しに動き出しており、農場周辺、温泉郡川内町、伊予郡砥部町、伊予市など、次々と実地調査していたが、いずれも希望条件を満たすに至らなかった。この折り、たまたま新しく北条市が候補地として浮上したため、市内上難波、庄の約25haを、時の市長や、関係の方々以案内いただき、地区内をくま無く検分した。その結果、平坦地と、傾斜地とを含むこれらの地区は、立地条件も農場用地として申し分が無いことがわかったが、予定地内に多数の古墳が発見されたため、造成に無理があるとされ、断念の已む無きに至ったことは、まことに残念であった。

このため、已むを得ず同市内八反地、中西外地区約19haに急ぎよ予定地を変更し、調査した結果、前地区に劣らない適地と認められたため、昭和49年2月、農場用地とすることに決定された。

昭和50年6月、関係機関の方々のご尽力によって、用地購入を終わり、直ちに土地造成に取り掛かり、昭和51年3月、新農場開設の運びとなった。昭和54年3月、造成完了後、昭和54～56年度、建物、コンピュータ関連施設、昭和57年12月、施設内部工事など、次々に竣工し、この時までに松山、新居

浜両農場の教職員すべてが、ここに終結を終わり、昭和58年1月、ようやく待望の移転統合が完結し、新農場は名実共に第1歩を踏み出した。

思えばこれまで、土地の物色、たび重なる各種資料の作成、建物その他の設計、数え切れない回数  
のミーティング、本部施設部とのやり取り、地元との折衝など、その時々  
の思い出は尽きないが、特に農場近代化の目玉の1つであった植物生態情報環境制御用計算機システムと、関連温室との計画には、業者の方々にたいへんお世話になりながらも、担当者としてそれなりの苦労があった。ともあれ、新農場の開設にこぎ着けることが出来たのは、長期にわたり、多くの方々の並々ならぬご支援の賜物であったことを忘れてはならないと思う。



写真一 2 附属農場（北条）  
前方は瀬戸内海

#### 4. 農場実習

農場実習で大切なことは、食料生産や、自然と調和した農業の中で、各種作物と、家畜とを育てる心を養いながら、実践を通じて問題意識を持ち、何かをつかむことである。この場合、生物生産の実際から経営管理に至るまでの具体的な指導が必要なことは、言うまでも無いが、単なる理論や、かたよった技術のみでなく、総合化した「農」を理解させなければならない。従来から部門として分けている作物、果樹、蔬菜・花卉、畜産などについて、それぞれ専門の中で指導するのも、それなりに意味があるが、それらを「農」の中で捉えるべきであろう。1例であるが、農場全般がよくわかる1人の教官が、どの部門であれ、実習に先立って当該実習項目の目的、意義を明示すると共に、農業全般におけるかかわりを十分理解させた後、担当者に引き継ぐことも、興味を起こさせ、実習動機の喚起につながり、効果的な実習展開に役立つと思う。それゆえ、実習指導者は、1つの専門分野に埋没するのみでなく、総合的な高い水準の知識と、技術とを兼ね備えるべきであろう。

学部講座の研究成果の生産の実際への応用は、当然であるが、農場における研究成果を背景とした実習も、迫力と、説得力とがあり、農業に対する理解力、創造力、研究心を養う上、特に効果があると考える。

しかし、実習教育で何よりも大切なことは、指導者の人間性で、これは日常の研究姿勢や、生活態度からにじみ出るものであろう。また、個々の学生の個性、境遇なども熟知し、適切な指導をおこなう熱意であらう。

#### 5. 研究

一般に農場における研究は、農場実習と、運営との中でおこなわれているが、独自の研究目標を持

ちながらも、あまりにも細かい実験を断片的に追うのではなく、現実の生産段階で生じる必要性や、時代の要求に基づくテーマを選んで、たゆまず継続していくことが大切で、特に農村の現場より提起される具体的な問題は、見のがすべきでないと思う。それらの研究が、たとえ短期間に十分な成果があらぬものであっても、直接生産に結びつくものを、着々と積み重ねる実証的な研究は、たいへん貴重で、農業の改善と、発展とに役立つと思う。

## 6. 運 営

言うまでもなく、農場は実習を主体とした教育と、研究とをおこなう場であるが、運営もこれらと不可分の関係にある。このため、適正な運営が必須であり、常に合理的に機能しなければならない。

農場の使命達成には、生産基盤を整備し、土地利用率を高め、高度の先進技術によって、生産性を向上させると共に、システム化や、総合化を図り、一方、運営の中では、教官、事務官、技官が協力して一つにまとまり、それぞれの職責を果たすことが必要である。しかし現実には、事務系に属する技官と、教官とのかかわり、部門別セクト主義など、種々の問題が生じやすい。このため、自己強調に走るのではなく、互の立場を理解し合うことが必要である。加えて、運営上、重要な役割を持つ農場主事の制度上の位置付けは、全国農場協議会でも、しばしば提起されているが、早急に明確にすべきであろう。

最近、農場運営に情熱を燃やす真の農場マンが少なくなったと言われている。単に農場を足場にするのではなく、高い思想を持ちながら、農場実習に熱意を示し、率先して農場発展に尽くす人を望むや切である。

## あとがき

振り返れば33年の長い年月、さまざまな出来事があった中で、十分期待にこたえ得なかったことを恥じ入るばかりである。それぞれの時代を通じ、多くの方々にたいへんお世話をいただいた。心から感謝を申し上げなければならない。

現在、国民経済の中に占める農業の割合は、さほど大きいとは言えないが、国の発展の基礎である農業を軽視すべきでない。

農業を取り巻く環境は、依然としてきびしいが、自然と調和した足腰の強い、競争力のある自立農業達成への努力を惜しんではならない。